

「劇薬入りのキツイ炭酸を一気に飲み干したような‘重たい’爽快感と痛快さ」
(鈴木剛介著『A Story／ある物語』についてのショート・コメント)

田口聡志 (同志社大学准教授)

鈴木剛介著『A Story／ある物語』(以下、単に本小説と略す)は、劇薬入りのキツイ炭酸を一気に飲み干したような‘重たい’爽快感と痛快さすら感じる作品だった。テーマは重たいし深いものであるが、しかしながら、何ともいえない不思議な爽快感すら感じてしまうのは何故だろう。

私は現在、社会科学(具体的には会計学、ファイナンス理論)に係る理論構築を職業的に行う人間であり、普段は文学の世界とはまったくもって正反対の世界にいる人間であるといえる。また同時に私は、本小説において主人公の勇介をあざ笑う(そして本小説ではむしろ悪役に描かれている(?))向井や家田鶴太らなどの「科学者」達(ここでの「」の意味は後述する)と、(一応形式的には)同じカテゴリーにいる人間であるといえる。しかしながら、そんな私でも痛快で面白かった。そう素直に言える作品であった。

以下、主人公である雄介が本小説中で展開する問題提起の重要性を検討しつつ、何がどう「劇薬」で、また何がどう「爽快」かつ「痛快」なのか、感じたことをざっくりぼらんに記すことにしたい。なお、本小説には、様々な「科学者」が登場し、勇介の考え方に対して言いたい放題、時には勇介を蔑み、冷笑する姿が描かれている。そして、私は(自分自身では「科学者」とは思っていないが(笑)、一応形式的には)「科学者」というカテゴリーに属する職業に就いている。よって、私の感想も、もしかしたら、このような「科学者」たちの「言いたい放題」のひとつと捉えられてしまう恐れもある。しかしながら、そんな危惧はとりあえず置いておくとして、私自身の素直な感想を書き記していきたい。ポイントは大きく2つある。

まず第1のポイントは、現代社会の根幹を支える科学が、実は人為的に作られたものであるということ、および、多くの「科学者」たちがそのことを忘れてしまっているということに対する問題提起の重要性である。

現在の科学理論においては、ポパーのいう「検証可能性」という概念が重要視されている。これはたとえば、ある考え方や「理論」があるとしたら、それは実験や現実のデータに照らして検証されなければならないし、もしくは、演繹的な論理により証明されなければならないため、そもそも科学足り得るためには、それが、何らかのかたちで検証可能性を有しなければならない(現実のデータにより帰納的に、もしくは論理により演繹的に「検証できる」という土俵に晒されておかななければならない)というものである。(実はこれに

については、p.37 でヒカルが「科学の実験とか数学の証明のように目で見えてはっきりと答えの出るもの」と述べている)。つまり、この考え方に拠れば、検証可能なものが科学で、他方、検証できないものは「疑似科学」である（そもそも科学足りえない）ということになり、本文中でも、勇介の考え方は、科学者たちに「疑似科学」に過ぎないとあざ笑われてしまうのである。

しかしながら、では一体なぜ検証可能なものが科学で、そうでないものは非科学なのだろうか。その起源を素朴に考えてみると、実はそのようなメルクマールが、決して自然発生的に生じたものではないということに気付かされる。つまり、自然にそうになったのではなく、むしろ、人間がそうした（人間が人為的に作った（線を引きいた））ものに過ぎない。つまり、科学と非科学との間に、線が自然と引かれているのではなく、人間がある目的のために（いわば都合よく）線を引きいたのである。しかしそのことに普段気付かず、我々は科学と非科学のメルクマールを所与の前提としてしまっている。そして、検証可能性のないものを（勇介を冷笑した多くの「科学者」がそうしたように）「非科学」として冷笑する。しかしながら、上述のように考えれば、科学というものが、決して絶対的なものではなく、人間が作り上げた、非常に脆く危ういものであるということが理解出来る。その意味で我々が普段何気なしに、そして疑いなく信じている科学は、自称「科学者」たちがいうところの「疑似科学」となんら変わらない（その意味で、本稿の前半部では、「」をつけて「科学」と表記している）。この点を踏まえれば、P.70において、勇介の考え方の「認識＝決める」という問題提起は、現代の「科学」信奉主義に対する重要な問題提起であるといえるし、また現代「科学」の存在自体を真っ向から否定し、解体を求めるものであるといえよう。その意味で、この問題提起は「劇薬」といえる。

しかしそれが、「勇介の考えを「科学者」が冷笑⇒しかし最終的には、ダヴェンポート氏により海外のトップジャーナルに掲載」というように、物語として疾走感溢れるかたちで描かれているのが「痛快」であり、そこにむしろ「爽快感」すら感じてしまう。鈴木氏自身、本作品のエンターテインメント性を公言しているが、このような重い問題を、エンターテインメントとして巧みに描いている点、鈴木氏の思考の深さと技量の高さを感じるところである。

また第 2 のポイントは、理論の解体の必要性和、全てを統一的に説明するような‘ザ理論’構築の必要性を提起していることの重要性である。これは、勿論、第 1 の点とも大きく関連するところであるが、たとえば、最近、社会科学や自然科学問わず注目されている論点としては、「人間のこころはどこにあるのか」「こころと脳は違うのか」「こころを知るにはどうすればよいのか」という古くて新しい問題がある。この問題に対して、現在、脳科学、神経科学、心理学だけでなく、経済学やゲーム理論、ファイナンス理論などといった社会科学の分野でも関心を有する研究者が増えてきている。そして、この「人間のこころ」の問題は、既存の分野の枠組みや、既存理論のフレームワークを飛び越えた‘総力戦’

で臨む必要があるのではないか、という危機感を持っている研究者が近年増えてきているのである（実は私もそうである）。そして、彼らの問題意識は、実は、勇介の問題意識と似ているようにも思われる。すなわち、現代の「科学」は、領域を問わず、実は異常なまでに専門化・細分化が進んでいる。しかしながら、そのために、多くの領域で、単なるマニュアルなパズル解きに終始してしまっており、本質的な問題を見失いはじめてきているようにも感じられる。しかしながら、そのことに危機感を覚え始めた研究者たちが、現代における重要課題のひとつとも言える「人間のこころの問題」について、既存の「科学」理論や既存分野の枠組みに囚われないかたちでの研究を行いはじめていたのである。

たとえば、私の研究する会計学やファイナンス理論は、会計制度や金融制度といった経済社会におけるインフラ構築のための理論を構築する領域であるが、こういった経済制度設計の問題は、それが人間の社会生活に密接に関連している以上、究極的には「人間のこころの問題」に行き着く。

しかしながら、これまでの伝統的な会計学やファイナンス理論においては、人間のこころの問題は捨象され、人間はいつでも経済合理的に行動する完璧な存在（無色透明な存在）として描かれてきたのである。そしてこのような人間観を前提としたうえで、ベストな制度や政策は何かというメカニズム・デザインがなされてきた。しかしながら、たとえば、近年数多く見られる企業の不正・粉飾事件などを鑑みても分かるとおおり、そのような非現実的な人間観に基づく制度や政策が、上手く機能するはずがない。しかし、機能するはずはないのに、既存の「科学」理論においてはそのような前提が捨て去られることなく、ずっと生かされ続けてきたのである（なぜそのような前提が、生かされ続けてきたのか、というのは興味深いテーマであるが、ここでは割愛する）。しかしながら、近年になってやっと、このような前提に対して、「こころをもった（限定合理的な）人間の存在を前提としたうえで、経済制度設計の問題をもう一度最初から考え直さなければならないのではないか」という気運が、（まだ一部ではあるものの）やっ和高まってきている。

すなわち、会計やファイナンス理論だけではなく、神経科学や心理学などの既存分野を超えた‘総力戦’により、経済制度設計の問題を考えていこうというムーブメントが、現在生じつつあるのである。

本稿を読んで私が感じたある種の爽快感は、実はこの点にあるのかもしれない。すなわち、私自身、現在このような「こころをもった人間の存在」を織り込んだ会計理論構築を目指しており、既存理論や既存「科学」に対する疑問感ないし閉塞感を抱いている。思えば「会計学」だとか「ファイナンス理論」だとかいった分野の線引きも、人間が人為的に行ったものである。そんな境界をいったんリセットしたところに本質があるのではないかと考えていた私にとって、勇介の問題意識や心意気は、共感できることが多く、その点でも爽快感や痛快さを感じたのかもしれない。勿論、現在、分野を超えて巻き起こりつつある上述のムーブメントは、あくまで（第1のポイントで述べた「」付の）「科学」の枠組みを超えるところまでは至っていないし、また、私の研究自体も、（既存「科学」に疑問を持

ちつつも) まだ既存「科学」の枠組みを飛び越えたものには、残念ながら至っていないのが現状である。しかしながら、いや、だからこそ、私は、深層心理で、勇介に心のエールを送りたいと思っていたのかもしれない。

以上のように、本稿は、①現代社会における「科学」信奉主義に警笛をならす意味でかなり危険な「劇薬」といえる。しかしながら、②そのような指摘が決して不条理かつアブノーマルなものではなく、方向性は決して間違っていないこと(たとえば現在一部の研究者間で起こり始めている「人間のこころの問題」解明の方向性などとも合致している)、および、③難しい問題を取り扱いつつも、鈴木氏の巧みなエンターテイメント志向により、物語としての疾走感(私は、本小説を最初から最後まで一気に読んでしまった!)や大衆性が失われていないこと、という2点により、結果として、爽快感や痛快さすら感じさせるものとなっているのである。

以上のほか、本小説は、実は、我々社会「科学」者にとっても、興味をそそられる発想が盛りだくさんである。たとえば、本小説では、世の中の制度やルールなどあらゆる‘仕組み’を、決して必然的なものとして捉えるのではなく、時間的な揺らぎの中でたまたまそうなったものであると捉えているが、このような発想は、現在、経済学者の一部でホットな方法論となりつつある進化ゲーム理論や比較制度分析などのアプローチと非常に親和性が高いものである。そして、それらがさらりと散りばめられている点は、鈴木氏のセンスの良さを感じる。その意味で、本小説は、現代「科学」の限界を、(近年注目を集めている上記方法論との総力戦で)突破する一翼を担うものになり得るかもしれない。そう考えると、本小説は、もはやエンターテイメントの枠を飛び越えて、現代「科学」の混沌を突破するカギとなるのかもしれない。そしてそうであれば、本小説は、(エンターテイメント性を欲する一般的な読者層のほか)実は、社会科学を志す学生や、若手研究者などが是非とも参照すべき1冊となるのかもしれない。

ディープでありながら、後味すっきり。しかしちょっと重たく苦い。そんな不思議な‘自己矛盾’を内包した本小説は、まさに「劇薬入りのキツイ炭酸を一気に飲み干したような‘重たい’爽快感と痛快さ」としかいいようのない作品である。鈴木氏の次回作にも期待したい。